

なつかしい仲間が大集合!  
思い出の動物たち

大森山動物園の初期は、児童動物園から引き継いだ動物で、豪快なジャンプが人気だったカリフォルニアアシカの「チビ」(写真①)、通算41頭もの子供を産んだライオンの「レオ」(写真②)、「チャコ」(写真③)夫婦、ファンターとニンジンの差し入れが届いた道産馬の「ドン」(写真④)などが代表格でした。

サル山の初代ボスザル「森太郎」は、圧倒的な体格が印象的でしたし、サル山では、珍しい双子の誕生もありました。

ワシミズクは、厳冬期に大雪に埋もれながら抱卵していました。

アフリカゾウとアミメキリンも、秋田に初お目見えしてから20年が経過しました。アフリカゾウのオス「だいすけ」とメス「花子」は、共に推定約400kgの体重だったものが、「だいすけ」推定約5<sup>ト</sup>、「花子」推定約3.5<sup>ト</sup>と成長しました。平成10年頃まで、担当者が一緒に空間で実施していた調教も、安全のため、柵越しに号令で実施するようになっています。



大森山動物園になってから入園した動物では、足を鎖でつないだ「繋ぎ鳥」の状態で何年も単独飼育した後、ペア飼育になって繁殖に成功したルリコンゴウインコの「ジョン」(写真⑤)。同じく、単独飼育の頃にヒヨコを鶏に育て上げ、後に片腕の「カリアゲ」とのペアで通算9頭の母親になったノドジロオマキザルの「サンペイ」(写真⑥)。母親が子育てをせず、偶然出産期が重なったイヌの「ノラ」に育てられ、後に、その体験を生かして自分で子育てをしたベンガルトラの「ラン」(写真⑦)などが話題となりました。また、中国蘭州市から友好の証に贈られたフタコブラクダの田田(写真⑧)は、通算12頭の子を産みましたが、介添え哺乳や人工哺育のサポートなど、その子育てには様々なエピソードがありました。

美形のキタキツネの「フレップ」は、横木の上で昼寝が好きで、寝具のCMに使われたことがありました。

赤ちゃんは全て可愛いものですが、中でも奥の寝室から初めて外に出てきたユキヒョウの子(写真⑨)や、台上に勢揃いしたレッサーパンダの三つ子(写真⑩)などの可愛さは特別でした。

平成3年にやってきた3頭のアミメキリンは、秋田の風土にも慣れ、メスの「ナナ」と「モモ」は、平成9年に亡くなった「のびた」との間に3頭ずつの子供を産んでいて、平成8年には、7本の長い首が林立していました。「ナナ」と「モモ」は、平成10年にやってきた「ジュン」との間に2頭ずつの子供を産んでいます。現在の「ジュン」と若いメスの「リンリン」にも赤ちゃんが授かることを願っています。

様々な活動

サマースクール

子供たちに夏休みの一日を動物園の飼育体験などで楽しんでもらおうと、昭和50年から開催しています。現在では、親子参加など年齢層、対象も広がっています。



写生大会

夏休みの思い出づくりに、動物を観察して絵画で表現してもらおうと、昭和53年から開催しています。親子二代にわたる参加者も多いようです。



雪の動物園と夜の動物園

雪の動物園は、平成3年、冬期閉園中の動物の様子をご覧頂こうと、公募制で無料の企画「冬のわくわく観察会」としてスタートしました。夜の動物園は、平成5年に開園20周年記念行事の一環として、夏の夕涼を兼ねて動物の夜の生態をご覧頂こうと開催しました。



動物慰霊祭

児童動物園時代から、亡くなった動物たちを供養する慰霊祭を開催していますが、現在も開園最終日のさよなら感謝祭の催しとして開催しています。



動物園条例

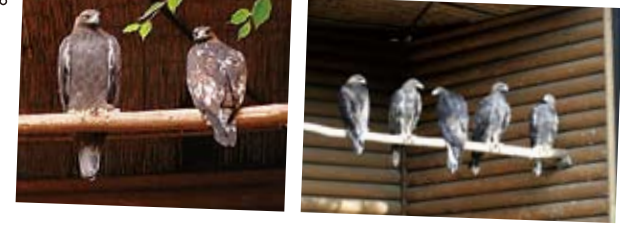
平成17年、大森山動物園の役割、あり方を見つめ直し、未来へ向けて設置理念を明確に示そうと、秋田市大森山動物園条例を制定しました。制定にあたっては、市民の声をより多く反映させる目的で、2回のシンポジウムを開催しました。



希少種の保存

ニホンイヌワシ

(天然記念物、環境省絶滅危惧IB、秋田県絶滅危惧IA、CITESII表)  
平成3年の初繁殖以来、毎年のようにヒナを育てています。複数ヒナの闘争防止に開発したローテーション式育雛法などにより、これまでに12羽の巣立ちに成功しています。児童動物園時代に幼鳥で保護したオスの鳥海は、国内最高齢の40才で今も健在です。



ゼニタナゴ

(環境省、秋田県共に絶滅危惧IA)  
平成15年、園内の沼「塩曳淵(しおひきがた)」で絶滅危惧種のゼニタナゴが見つかり、保全活動を始めました。天敵のアメリカザリガニを駆除したり、保全池でゼニタナゴと産卵するための貝を保護しています。平成20年からは3年連続で稚魚と稚貝をふ化させて沼に帰しています。

